

Beyond "Draw"

The Secret of Making Modern Painting

# 「描く」を超える

現代絵画 制作のひみつ

**2020年春に開催予定であったものの、新型コロナウイルス感染拡大により中止となった展覧会が、2年半の時を経て、再び開催されます。**

小杉放菴記念日光美術館のコレクションの一つの柱として、1990年代から2000年代に制作された絵画が挙げられます。この時代の絵画は、「日本画」「洋画」の枠組みや、「描く」という行為すら超えた作品もあります。

画家たちは、どのようにしてこれらの作品を「描く」に至ったのか。本展は、「線を引く」「空間を刻む」「重ねる」「たらす」「待つ」の5つのキーワードを軸に、現代を代表する7人の画家の作品をならべることにより、彼らの制作のひみつを探るとともに、「描く」という行為の多様性に迫ります。

## ■ 展覧会概要

会期 2022年11月26日（土）～2023年1月29日（日）

休館日 毎週月曜日（1月2日・9日は開館）、1月10日（火）

年末休館 12月29日（木）～31日（土）

年始休館 1月4日（水）～6日（金）

開館時間 9時30分～17時（入館は16時30分まで）

入館料 一般730（650）円、大学生510（460）円、高校生以下は無料

※（ ）内は20名以上の団体割引料金

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、日光市公共施設使用料免除カードの交付を受けた方とその付き添いの方1名は無料

※第3日曜日「家庭の日」（12月18日、1月15日）は、大学生は無料

主催 公益財団法人 小杉放菴記念日光美術館、日光市、日光市教育委員会

## 1. 線を引く

線を引くこと、それは描く行為のはじまりとも言えます。本展のはじまりとなるこの章では、一定のキャリアを積んだ後に、「線を引く」ことに独自の画境を切り拓いた2人の画家を紹介します。

### 菊地武彦（1960-）

学生時代に公募展に入選を果たすも、20代の終わり頃、「自分は何を描くべきか」という問いにぶつかった菊地武彦。大学院修了後、郷里の足利に戻り、試行錯誤の末、「線を引く」方法にたどり着きました。岩絵具で力強く引かれた線からは、画家の「描きたい」と感じた衝動や気骨を感じ取ることができます。さらに目を凝らして線を見ると、岩絵具の凹凸が。ここから、原料・鉱石の素材感を味わうことができます。

近年菊地が精力的に手がける、チャコールやグラファイトを用いたドローイングも併せてご覧いただきます。



① 菊地武彦《線の気韻 1993-9》1993年、  
小杉放菴記念日光美術館蔵



② 菊地武彦《線の形象 2022-19 (Drawing)》  
2022年、作家蔵

### 二木直巳（1953-）

美術大学で彫刻を学ぶも、方向性の違いにより、卒業目前で中退した二木直巳は、後に平面に活路を見出し、33歳頃から『見晴らし台』シリーズを手がけるようになります。『見晴らし台』と冠しながらも、実際の風景はどこにも描かれておらず、黒色の線と緑色の色面が広がる画面は、絵画というよりも設計図のような印象さえも与えます。これは、二木が鉛筆と色鉛筆を用いて線を引いたことにより生まれたもの。禁欲的な行為の末に完成したとも言えるこれらの作品ですが、画面にはところどころフリーハンドの線が見受けられます。遠くから、そして近くから彼の作品をご覧ください。作品の印象は大きく変わることでしょう。

## II . 空間を刻む

青空の下に広がる湖や丘、山々一見る者に清新な印象を与えるこれらの風景画を手がけるのは、日光市出身の洋画家・入江観（1935-）です。その清新さのひみつこそ、「青空」にあると言えますが、その画面の内奥には、画家の並々ならぬ思いが潜んでいることが、82歳のインタビューでの発言から明らかになります。

絵描きによっては、空は平らだから”塗る”っていう感覚でやってるでしょう？だけど、”空間を刻む”っていう意識がもしあれば、それでは済まないはずなんだよね。

入江観・鈴木日和・迫内祐司「入江観インタビュー：茅ヶ崎のアトリエから」『開館20周年記念 入江観 故郷一日光を描く』（展覧会カタログ）小杉放菴記念日光美術館、2017年、8頁

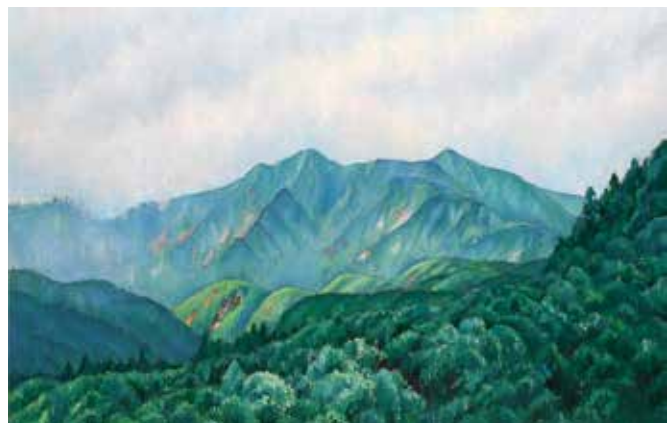
確かに目を凝らして青空を見ると、決して青一色で塗られているのではなく、さまざまな色を用いて、そのことばの通り「空間を刻む」かのようにして描かれているのです。

画家はいかにして、この画境にたどり着いたのか。入江の渡欧前から現代に至るまでの作品を展観することにより、清新な風景画の制作のひみつを深く探ります。



③ 入江観《湖上凱風》1992年、  
小杉放菴記念日光美術館蔵

④ 入江観《懐郷の山》2010年、  
小杉放菴記念日光美術館蔵



### III. 重ねる

2.1 メートル四方のキャンバスに、緑色とグレーの色面が併置されたこの作品。色を重ねることにより立体感を帯びたこの色面は、まるで見る者に迫るかのようです。

この作品を手がけた佐川晃司（1955-）は、東京藝術大学油画専攻の出身。学生時代は、まるで塗りつぶしたかのような平面的な色面を併置した作品を手がけてきましたが、30歳で制作拠点を関西へ移したことを機に、彼の作品は立体感を帯びてゆきます。難解な抽象絵画を思わせる《背にとどまるもの 04.8-1》は、アトリエを構える滋賀県の田園地帯の風景を描いたもの。この色面には、田圃や緑野、農道などの風景のイメージが重ねられているのです。

会場では、本作のドローイングも併せて展示。黒一色のドローイングが、どのようにして完成作へ至るのかも比較しつつご覧ください。



⑤ 佐川晃司《背にとどまるもの 04.8-1》  
2010年、  
小杉放菴記念日光美術館蔵

### IV. たらす

本章で紹介するのは、筆などに含ませた絵具を「たらす」という、いわば画面と少し距離を置いた方法で作品を手がける2人の画家です。画面いっぱいに広がる絵具からは、画家が絵画と向き合った軌跡を見て取ることができます。

#### 間島秀徳（1960-）

この作品（作品番号⑦）と対峙したとき、多くの人々はきっと圧倒されることでしょう。大きな青色の画面に、上から下に流れ落ちる白い顔料は、瀑布や波濤のようにも見えます。

見る者によって異なる印象を与えるこの作品を手がけたのは、自らを「超・日本画家」と称する間島秀徳。その制作方法も類を見ないもので、アクリル絵具や岩絵具、川砂などを画面にたらし、水の力を用いて傾けることを繰り返し、作品は完成します。

その制作方法から「新しい」と評されがちな間島の作品ですが、その画面の内奥には、年代や国籍を「超えて」、あらゆる人々の心呼び覚ます絵画を目指す画家の思いが潜んでいます。本展では、小品から大作まで4点を公開。画家と水の力の化学反応をお楽しみください。



2022.11



⑥ 間島秀徳《Kinesis No.407 (Bakufu Un)》  
2009年、小杉放菴記念日光美術館蔵



⑦ 間島秀徳《Kinesis No.607 (seamount)》  
2014年、個人蔵

## 中村功（1948-）

武蔵野美術大学でデザインを学んだ中村功は、版画や立体を手がけた後に、絵画に活路を見出した画家です。赤や緑、黄色などさまざまな鮮やかな色が、溶け合うように画面に広がるこの作品は、1980年代後半から手がける『意勢』シリーズの一つで、油絵具をスプーンで画面にたらしことにより手がけられたもの。その色彩はさることながら、まるで車のボディを思わせる輝きからは、絵画を「人工物」と捉える画家の考えを見て取ることができます。



⑧ 中村功《Surface / Figaro 意勢IV -30》  
2005年、小杉放菴記念日光美術館蔵

## V. 待つ

グラデーションをなした3つの円形状のものが浮かび上がる《ティリニ》は、画家が画面に直接働きかけることで生まれたものではありません。この極めて不思議な作品は、山田昌弘（1960-）がゆるく張ったカンヴァスに噴霧器で絵具を撒き、それを乾燥させることによって完成したものです。

画材を準備する以外、山田は何もしていないようにも見えますが、絵具が乾ききるまで、作品のそばでじっと「待つて」いるのです。画家の意志を「超えた」究極の制作による作品を最後にご覧いただきます。



⑨ 山田昌弘《ティリニ》  
2006年、小杉放菴記念日光美術館蔵

## ■ 会期中のイベント

出品作家によるクロストーク（事前申込制・要入館料）

日時：2022年12月4日（日）14時～

会場：当館エントランスホール

登壇者：入江観氏（洋画家・女子美術大学名誉教授）

菊地武彦氏（画家・多摩美術大学教授）

聞き手：清水友美（当館学芸員）

申込方法：11月3日（木・祝）より電話にて受付

定員：50名

担当学芸員によるギャラリートーク

（予約不要・要入館料）

日時：2022年12月17日（土）

2023年1月8日（日）・1月28日（土）

各日11時～

ミニコンサート『新春 邦楽の調べ』（予約不要・参加無料）

日時：2023年1月2日（月・祝）

13時30分～／15時30分～（各回30分程度）

会場：当館エントランスホール

出演：津上弘道氏（尺八演奏家）

岡本悠希氏（箏曲演奏家）

曲目：春の海 萌春 ほか

## ■ 次回展予告

清水比庵生誕140年 歌書画の人 比庵と放菴

2023年2月4日（土）～4月9日（日）

## ■ 本展に関するお問い合わせ先

小杉放菴記念日光美術館

〒321-1431 栃木県日光市山内2388-3

Tel: 0288-50-1200 Fax: 0288-50-1201 HP: [www.khmoan.jp](http://www.khmoan.jp)

担当学芸員 清水 E-mail: [shimizu-tomomi@khmoan.jp](mailto:shimizu-tomomi@khmoan.jp)

「描く」を超える ―現代絵画 制作のひみつ―  
広報用画像申込書

FAX: 0288-50-1201 E-mail: shimizu-tomomi ■ khmoan.jp

小杉放菴記念日光美術館 清水行

■ 画像使用に際してのお願い

- ・ご希望の図版の左枠内に☑を入れて、FAXかメールにてお送りください。  
(リリース中の図版に付された1～9が、図版番号です)
- ・使用目的は、本展のご紹介のみに限ります。
- ・画像は、原則、全図でご使用ください。トリミング、部分使用、文字のせは無断で行なわないよう、お願いいたします。
- ・掲載する場合は、各画像のキャプションを必ず記載してください。
- ・画像のご使用は1申込につき1回とし、使用後のデータは破棄してください。
- ・基本情報確認のため、展覧会担当まで必ず校正紙をお送りください。
- ・掲載見本を展覧会担当までご送付いただきますよう、お願いいたします。

☑	No	キャプション
	1	菊地武彦《線の気韻 1993-9》1993年、小杉放菴記念日光美術館蔵
	2	菊地武彦《線の形象 2022-19 (Drawing)》2022年、作家蔵
	3	入江観《湖上凱風》1992年、小杉放菴記念日光美術館蔵
	4	入江観《懐郷の山》2010年、小杉放菴記念日光美術館蔵
	5	佐川晃司《背にとどまるもの 04.8-1》2010年、小杉放菴記念日光美術館蔵
	6	間島秀徳《Kinesis No.407 (Bakufu Un)》2009年、小杉放菴記念日光美術館蔵
	7	間島秀徳《Kinesis No.607 (seamount)》2014年、個人蔵
	8	中村功《Surface / Figaro 意勢IV -30》2005年、小杉放菴記念日光美術館蔵
	9	山田昌弘《ティリニ》2006年、小杉放菴記念日光美術館蔵

貴社名：

\_\_\_\_\_

媒体名：

\_\_\_\_\_

ご担当者名：

\_\_\_\_\_

TEL：

\_\_\_\_\_

FAX：

\_\_\_\_\_

E-mail：

\_\_\_\_\_